

「農業から見た環境保全」

森村学園中部部 砂金健一

一 はじめに

日本の農山村の危機はどんどん深刻化してきてしまった。「国際分業」の名のもとに、大資本(工業品輸出)のために農業を犠牲にすることを「国益」とする政策が新たな形で進展したのだ。農業の直面した困難は、兼業化・嫁不足・後継者難という事態となって表面化してきた。さらに、90年代に入った今は、リゾート法によって全国いたるところで、農山村では最後に残された自然の身売りさえ始まっている。

このような状況下で、今日の日本農業そして農山村を中1地理の授業ではどう描いたらいいのかを本稿の『農業と環境保全』というテーマもその中に位置付けながら、私なりに考察してみたい。なぜ日本の農業の描き方に軸足をおくのかといえ、日本農業を守ることが、結果的に環境保全につながると思うからである。また、農業を守るためには農民や農村の営みに対する正しい理解の広がりが必要だからである。

二 日本農業の学習の中で生徒が学んだこと

1 農業の何を描いてきたか

私の学校の生徒は、三分の二が都市の住宅地や商業地、残りが都市化が進みつつある地域からの通学者であり、「つくる人」から切り離された「食べる人」として生活している。

中一地理の授業で工業優先社会の中での「農業の姿」として従来から取り上げてきた問題は、日本農業のかかえている現実・農政の矛盾には違いないが、なにしろ暗いイメージがつきまとうものになりがちであった。その学習の結果、多くの生徒たちは農民に同情し国の政策に疑問を持つが、やはりどこか他人事である点は変わりなかった。そのような農業学習を終えたあとの感想には「農家に嫁がこないというが、それは当然だ。だれでも、土に汚れたり、休みもなく毎日長時間働くのはいやだからだ。農家が、減るのは困ったことだけれども、私も農家の仕事を手伝わされるのはいやだ。」という内容が多くみられる。

そして、多少考える生徒も、次のようなところから先へは出られない。「農業というのは、人間の生活の一部になくはいけないものだと思います。衣・食・住という言葉があるように食は最優先されるものです。それを他国他人にまかせるのはどこか狂っていると思います。今、日本はとりあえず、平和で豊かです。でも、それはあやふやな積み木の上に隠れているようなものです。つまり、少し揺さぶれば全て壊れてしまうのです。見せかけにすぎないと思います。工業より農業の方がずっと必要なものなのに、なぜこんなに日本の農業が衰退していったのでしょうか。それは、やはり政府のやり方に問題があったのだと思います。若者が農業を嫌がるのはダサイ・つらい・もうからないなどの理由からですが、誰かがやらなければ日本の農業の未来は真っ暗です。」農業の重要性を認め、誰かがやらなければならないといいながら、まだ「食べる人」からしか見ていない。農の営みについての人間としての共感が出ていないのだ。

2 主体的な学習を成立させるために

私たちは、生徒一人一人に、農民とのふれあいの中で農の営みと暮らしを考える主体的な学習を成立させようと考え、数年前から一学期の農業学習をふまえてレポートのテーマを自分で決めさせ夏に取り組みさせてきた。近年、選ばれるテーマで目立つのは「減農薬」「無農薬」「有機栽培」である。約半数近い生徒が選ぶ。これは、農業の授業の導入でビデオ『今、野菜が危ない!』『ビニールハウスの中で』『あなた、これでも食べますか?』などをつかって、「農民自身の受ける農薬害」「生態系の破壊」「化学肥料と農薬の使用量の急激な伸び」「連作障害」「ポストハーベスト」

「化粧野菜」「有機栽培の定義がないのにシールの氾濫」などを取り上げているため、消費者としての願いから食の安全についての関心が高まっているためである。

授業の中で、自分たちが農薬の使用量が急増してきた時代に生まれ育ってきたのを知った生徒たちはビデオにてでくる「こだわりガンコオヤジ」たちに対し、日本にもこういう農民がいたんだと強い共感を示す。その中の一人の世田谷のOさんは近所に住んでいる生徒も多いこともあってじかに話を聞いてみたいと夏休みに訪問する生徒は、毎年二十人をこえている。そして、今の農法に取り組むようになった理由である過去の農薬害の体験や生態系の変化についての話を聞かせてもらい、農作業を手伝い、堆肥の中に手を入れてその温度に驚いたりして帰ってくる。ある生徒は、次のように書いている。「農業レポートをやっている色々な人に出会いました。今まで会ったこともないOさんでしたが初めてお話を聞きにいった時も笑顔で農業（有機・無農薬）についてご親切に話してくださいました。私のお会いした農家の人たちはみんな生き生きとして、自分の仕事が好きだとおっしゃっていました。一番嬉しいのはお客さんの喜んでくれる顔だそうです。農家との交流は大切なことです。私は、産地直送というのは新鮮とかそういう問題よりも交流があるのでいいことだと思います。」

この生徒のようにレポート学習を通じて、農の営みに対する農民の心にふれて、交流に注目する者は毎年かなりの人数にのぼる。この点での主体的な学習に発展させるという成果つまり、授業で学んだ知識をたよりに「自分のこだわり」の掘り下げに取り組むレポート学習の意義はそれなりに一応確認できると思うし、「食べる人」だった生徒たちの農民との出会いから学ぶものの大きさは計り知れないものがある。

どのような農民との出会いがあるかは、それによってその生徒の農民像が決まってしまうほど重要である。しかし、農民との出会いは、偶然性に左右される部分が大きいという問題がある。

3 今までの農業の授業の弱点

レポートのテーマの選び方・課題意識の形成のベースには一学期の日本農業の授業がある。生徒の選んだテーマの多くは、依然として「食べる人」の視点にとどまっている。このことは、私の日本農業の授業の弱点を示していると思う。つまり、授業の中では農民・農村が魅力的に描けていないということだ。とくに、農の心や自給の心意気を失わず、百姓としての気概を持った人々の姿の描き方が不十分なのだ。そのため、「食べる人」として望ましい日本農業を考えることにとどまり、『農民の生き方への共感』がレポートで確かめる課題に登場してこないのだ。

そこで、農民や農業の生き生きした姿の発見は授業よりもレポート活動での学習の成果に期待するという今までの取り組みでいいのか？こんな疑問が出てきた。

三 人間観・労働観につながる農民・農村観

都市・農村にかかわらず、今日の日本の小学校から高校までをおおっている受験体制に身をおく生徒たちの中に知らず知らず醸成されている学校での点数で人の能力を評価する人間観やそこからくる労働や職業に対する種々の差別的偏見（価値観）は、本校においても例外ではない。その根底にはエリート校から一流大学そして大企業への就職というコースが将来の豊かな消費生活や余暇を保障される間違いのない道という観念（拝金主義）が横たわっている。そして、それは3Kを嫌う労働観にもつながっていく。農民観についても、生徒の周りでは今でも「田舎者」とか「どん百姓」とかいう蔑視を込めた表現が社会進歩についてこれない人という意味合いでつかわれている。その上、近年の農業バッシングだ。生徒たちは、その結果、農業・農民に対してある種の偏見を持っている。それは経済「大国」日本の国民として途上国の人を見下す意識と共通の根を持ったものである。さらにそこへ、私が授業によって描いてきたその姿も「きつい労働」そして「衰退産業」や「いじめられっこ産業」としての暗いイメージが主だったため、人間像・労働像を通して生徒の中の農民に対する偏見を揺さぶることができなかつたように思う。

だとしたら、地理の授業は、生徒のそのような「農村観」「農民観」を揺さぶるために、別の視座から本物の豊かさとは何かを問いながら迫り、農村での暮らしや営みに生徒の目を引きつける

描き方が必要ではないか。それは百姓とは何かを誇りを持って自分の言葉で語る農民の姿や生業として農を営む農民の人間像、そして都市の人間にとっても人間らしく生きるためには農山村は欠くことのできない環境であるということを描くことではないかと考えた。

四 ヨーロッパ農業の学習の中でみえてきたこと

そこで私は、昨年、日本農村についての自らの取材不足をカバーするために、「土は生命を歌う」全国農村映画協会制作のEC農業を描いたビデオを、教材として活用してみた。日本農業の学習を終えた後だけに、同じ先進国でありながらという対比の効果を期待したからだ。以下、ビデオの抜粋。

EC農業は、従来の農業政策を大きく転換させようとしている。生産性の向上だけでなく、環境を守る農業の役割、安全な食糧の生産などが新しい農業への挑戦と位置づけられてきたのだ。そして、その土台は家族農業とされ、国民の支持と国との合意はすでに形成されているといわれる。つまり、環境保全や安全という新しい価値観が正面に据えられてきているのだ。貨幣で測る価値観とは別の価値観だ。

(例1) イギリスのヨークシャーは、農業生産の規模が拡大される中で水の汚染・景観の破壊などが起きた。そこで、環境調和型農業の指定地域19ヶ所の一つとなった。ここでは、肥料などを減らし伝統的な農法を行えばよく、それによって生産の削減、景観の維持・保全に寄与しているという評価がなされ、収入が減った農家には補助金が支払われる。また、都会の家族が、農家で休日を過ごし、心のこもった手料理や美しい景色を楽しむというファームホリデーも広がってきた。農村のもついろいろな役割が見直されているのだ。

(例2) 西ドイツの50%以上が不利な農耕地のハンディキャップ地域だ。その一つバイエルン州のある村では、ほとんどが兼業農家だが、家畜を飼い、老人も大切な農業の担い手で自給自足を暮らしの基本としている。副業でペンションを経営するため自宅を改造する農家には政府の援助がある。余暇社会のドイツでは農村で休暇を！ということで二週間から一ヶ月の長期休暇の家族連れのお客が多い。農家が田園風景の維持に大いに貢献していることが評価されているのだ。そして、化学肥料や農薬を減らし、有機質を使った農業が見直されている。土壌生産力の永続が『生命の産業』の源と認識されているのだ。などなど。

それらの中に生徒達が発見するものは、農村・農民は「食べる人」のための「つくる人」としてだけ存在しているのではないということだ。金をかけて生産量をふやしてコストダウンを図るといった効率中心の農業とはまったく異なる「人間らしく生きる人」の農業が目指されていることを知るのだ。そこに映し出されるヨーロッパの農業政策は自給を国策として位置づけている。また、ハンディキャップのある山間地の農業にも「景観の維持」「精神の安らぎ効果」「水や地力の維持」「緑の保全」などの環境保全の役割と生産の削減への寄与を認め、その生産能率が悪いのは当然視した上で、伝統的農業が持続するように補助金が出されている。それは、国民的合意の下に『家族農業』を大切にしようとするものである。その『環境調和型農業』を描いたビデオ学習の授業を終えた後、何人かの生徒が「ああいう農家だったらお嫁にいったら農業をしてもいいな」という感想をもらした。

ヨーロッパには、農業は人間の命を生き育てる土台となる仕事、農村は都市に住む人間が命の洗濯のために家族連れでリゾートにやってくるような国民的な財産という位置づけがあって、農民(家族農業)労働と農村文化には誇り高い位置があることをビデオの中から感じたからに違いない。農村の存在自体が人間らしく生きるための環境として社会から大切にされている「農業・農民観」が伝わってくるのだ。

この感想から生徒たちのもつヨーロッパに対するあこがれの気持ちを差し引いてみても、生徒の反応は、その農業の姿に対する人間としての共感を示していることに注目したい。それは、「食べる人」と「つくる人」が共に「人間らしく生きる人」として拝金主義を排除した新しい価値観を共有しようとする営み、現代社会の中で失ったものを人間として取り戻そうとする営みに対する共感である。同時に、私の日本農業の授業に対する次の課題を示してくれている。

五 今後の課題

経済的合理性とはまったく異なる価値観に立つ農業像こそが、今求められているのではないだろうか？

今までの私は、統計的な数値をながめて、第二種兼業農家の増加や専業農家の減少をマイナスのイメージでみていた。この点についても、一所懸命に表土を守り続けてきた定住を願う農民や兼業農家の自給自足の姿に対しての評価は「環境保全に果たす役割」の観点から考え直してみたい。国策に反し、離農を嫌ってきた彼らこそ、日本の環境保全型農業の担い手となる存在なのではないかと思うからである。

今、大切なのは、農業の資本主義的發展とは違う価値観をもって、生まれた土地で好きな農業をこれからも続けたいという小農民の願いと暮らしに注目することだと思う。

また、過度の農業の機械化がすすめられる中、日本の農村で生産労働から遠ざけられてきた老人の役割の復権のあり方、そして第二種兼業農家の主な労働力である婦人のとらえ直しも同様に注目に値するものがあると思う。

とすれば、そういう農民にまず私が会えることがそのような授業を構成するための不可欠な前提になる。つまり、そのような農民たちとの出会いによって、教師自身がある種のカルチャーショックを感じるほどに、自身が知らず知らず身につけてしまっていた価値観に揺さぶりを受ける体験がそれらを教材化するためには有効だと思うからである。

ある地域の農家といっても一軒一軒経営の中身は違う。なぜがんばっているのか？どうがんばっているのか？どのような展望をもっているのか？など生徒達の「農村観」「農民観」に迫る授業を造っていくためには、それらの農民・地域の営みを一つ一つ具体的に押さえてくる必要がある

六 終わりに

私のような都会育ちの教師ではない農業を良く知っている農村出身の全国の地理の先生たちは、都会でそして農村で日本農業を、農民の姿をどう描いているのだろうか？是非教えていただきたい。これが「農業を守ることと環境保全」という本稿の執筆依頼をうけた時、自身の授業実践には十分なものがないことは百も承知で引き受けてしまった最大の理由である。私は日本農業の授業を終えた後、昨年夏に東北・北海道の農村を訪問した。そこで見たものは、自給による本物の食文化を楽しむ、水を守り、土をつくり、我が子のように作物を見つめる姿であり、雑木林の効用を語る農民の確かな目であった。福島の農民の「俺たちは最高のぜいたくをしている。」という言葉はきわめて新鮮であった。また、岩手でも福島でも聞くことのできた「農村は嫁不足ということはない。人次第だ。」という言葉もあらためて聞かされたことは印象的だった。これらの意味を確かめるためにも、さらに農村を歩いてみようと思っている。

私自身が出会った農民の言葉の重みをかみしめながら農業と人間の魅力をヨーロッパではなく、日本の農民・農村をそれで描くこと、そして生徒と共に豊かさについて考えることが私の課題であると思う。それは、生業としての農の存在を尊重しようという人間としての共感こそが環境保全の砦となると思うからである。